

# ATDP(The Attitudes Towards Disabled Persons Scale)を 作業療法学生に適用するための予備的研究

村井 真由美・境 信哉・青山 宏\*  
出口 毅\*\*・西村 良二\*\*\*

## Application of The ATDP (The Attitudes Towards Disabled Persons Scale) for Occupational Therapy Students

— the Preliminary Research —

Mayumi MURAI (OTR), Shinya SAKAI (OTR), Hiroshi AOYAMA (M. S., OTR)\*

Takeshi DEGUCHI (Ph. D.) \*\*, Ryoji NISHIMURA (MD) \*\*\*

**Abstract :** The attitudes toward disabled person were studied in 122 occupational therapy students in three OT schools. Their attitudes were assessed by a survey test of the Attitudes Toward Disabled Persons, developed by Yuker, et al. We tried to extract the factors from the ATDP scale, but we could'nt get them in this study. We investigated the results of 2 schools which got the data of 2 grades. As to the total scores of the ATDP scale, one school's students had negative attitudes toward disabled persons as the grade advanced. The other school's students did not vary the attitudes as the grade advanced. Additionally, we compared the former to latter about 3 factors, extracted by Yamamoto, et al ; ① negation of character, ② negation of ability, ③ affirmation of normality. The former showed the both negative attitudes, and the latter showed the positive attitudes as to the factors. The results in this study suggested some factors, including occupational therapy curricula, influenced the occupational therapy students' attitudes toward disabled persons. We think it need to make it clear about these factors and to research using larger sample sizes in the future study.

**Key words :** occupational therapy, attitudes, education

### はじめに

作業療法士はその業務において何らかの疾患や障害を持った人を対象とする保健医療職のひとつである。障害を持ったクライアントに対する作業療法士の態度は治療的關係に重要な役割を果たすとされており、肯定的、あるいは否定的な態度が治療

に影響を与えられている。<sup>1-3)</sup> また、医療従事者の態度教育の必要性が述べられている<sup>4)</sup> ことと同様に、作業療法教育においても知識や技術の習得と同様に適切な態度の育成は重要な課題である。医学教育において障害を持った人に対する態度は、訓練 (training) と共に変化する<sup>5)</sup> と言われている。つまり、態度について調査することには、作業療法学生がどのように対象を捉え、捉え方の要素がどのようなものであるかが明らかになると共に作業療法教育の効果を判定できるという可能性がある。国内の研究では、医学生や看護学生を対象に精神障害(者)に対する態度の測定や、その態度の変容、態

\* 山形県立保健医療短期大学作業療法学科  
Yamagata School of Health Science, Department of Occupational Therapy.

\*\* 山形大学教育学部  
Yamagata University, Department of Education

\*\*\* 広島大学医学部  
Hiroshima University, School of Medicine

度を変容するための介入手段等の研究<sup>7-10)</sup>がいくつか行われているが、筆者らが調べた限りでは、作業療法学生についての研究は見られなかった。また、身体障害(者)に対する態度についての調査はどの医療職においても見られなかった。国外においては同様に医学生、看護学生、その他医療系学生に対する調査が精神障害に限らず見られ、作業療法学生については3件<sup>1-3)</sup>見られた。

態度測定 of 尺度には数種類あるが、今回筆者らはいくつかの先行研究で用いられている Yaker, Block, & Young (1966) らの開発した The Attitudes Toward Disabled Persons Scales (ATDP)<sup>14)</sup>を用い、障害者に対する日本の作業療法学生の態度を測定することが可能であるか、あるいはカリキュラムの習熟度によって変化する態度の因子があるかについて探索する目的で予備的調査を行ったので報告する。

### 対象者

対象者は管轄および修業年数の異なる作業療法士養成校3校の作業療法学生122名である。養成校別の対象の内訳についてはA校(国立4年制大学)2年生33名、3年生26名、B校(公立3年制大学)1年生12名、2年生17名、C校(私立4年制専門学校)2年生34名である。A校の学生については平成8年1月、B校の学生については平成10年9月、C校の学生については平成10年8月に調査を行った。各校、各学年のカリキュラム進行状況の概要はTable 1のとおりである。

### 方法

#### 質問紙について

障害者に対する態度の調査には Yaker, Block, & Young (1966) らの開発した The Attitudes Toward Disabled Persons Scales (略して ATDP)<sup>14)</sup> (Table

2) を邦訳し、オリジナルに忠実なレイアウトにしたものを用いた。ATDPには三種類あるが、今回は20項目の質問から構成されているForm-0を用いた。項目は、障害者に対する態度に関する否定的な文章と肯定的な文章から構成されており、総得点が高いほど障害者(disabled persons)は障害のない者(non-disabled persons)と同じであるという態度を示すようになっている。評価尺度は0を除く、-3から+3までの6段階評定である。得点化はATDPマニュアルに基づいて行われた。

#### 手続き

ATDPをA校、C校の学生については講義中に配布し、同時間内に回収した。B校については個別に手渡し、その後回収した。

#### 分析

1. 各学生の ATDP Form-0 の総得点を各養成校・学年を1グループとして、それぞれ分散分析を行い、比較した。
2. 作業療法学生について何らかの因子構造が見い出せると仮定し、3校の学生のデータを全部まとめ、因子分析を行った。因子分析にあたっては、主因子法で因子を抽出した後、直交/バリマックス法により因子軸の回転を行った。
3. 具体的にどのような態度の要素に変化が見られたかを調べることを目的に因子分析によって得られた因子解について同養成校内で学年ごとの比較を分散分析によって行った。分析には Stat View ver. 4.5 を用いた。

### 結果

#### 1) 総得点の変化

各学年における総得点を Table 3 に示す。分散分析を行ったところ、 $F(4,121)=2.383$ であった。有意差が見られたのがB校2年次生とA校の両学年、B校の1年次生、C校の1年次生であった ( $p <$

Table 1 各養成校の履修状況

	一般教養	専門基礎科目	専門科目	臨床見学・実習
A校2年	○	△	△	1日～2日の臨床見学経験有
A校3年	○	○	○	3年次180時間履修済
B校1年	△	△	△	1年次45時間履修済
B校2年	○	△	△	1年次と同
C校2年	○	△	△	年次40時間 2年次180時間履修済

○…履修済 △…履修途中

注: A校3年とB校2年は前学年の臨床実習を経験している。

Table 2 The Attitudes Towards Disabled Persons Scales (ATDP)<sup>15)</sup>

＜障害者に対する学生の意識調査：ATDP-0＞

平成\_\_\_\_\_年\_\_\_\_\_月\_\_\_\_\_日

学籍番号\_\_\_\_\_

以下の質問は、障害者に対する学生の意識を明らかにするためのものです。20 個の質問がありますが、各項目について右のカッコ内にあなたがどのように感じたか書いて下さい。

選択肢は下のようにな 6 段階あります。

- |              |                 |
|--------------|-----------------|
| + 3: とてもそう思う | - 1: ほとんどそう思わない |
| + 2: かなりそう思う | - 2: あまりそうは思わない |
| + 1: 少しそう思う  | - 3: 全くそうは思わない  |

じっくり考えるのではなく、頭にパッと思いついた答えを書いて下さい。

- |  |     |
|--|-----|
| 1. 障害を持っている子どもの親は健常児の親ほどに厳格であるべきではない。  | ( ) |
| 2. 身体障害者は健常者と同じくらい知的である。               | ( ) |
| 3. 健常者と比べて、障害者とは仲良くやっていくことがたいてい容易である。  | ( ) |
| 4. 多くの障害者は自分のことをかわいそうだと思っている。          | ( ) |
| 5. 障害者は他の人と全く同じである。                    | ( ) |
| 6. 障害者のための特別な学校は存在するべきではない。            | ( ) |
| 7. 障害者は特別なコミュニティで暮らしたり、働いた方が望ましい。      | ( ) |
| 8. 障害者の世話をするのは政府の義務である。                | ( ) |
| 9. 多くの障害者は非常に悩んでいる。                    | ( ) |
| 10. 障害者には健常者と同じ基準を望むべきではない。            | ( ) |
| 11. 障害者は健常者と同じくらい幸福である。                | ( ) |
| 12. 重度の障害者は軽度の障害者に比べて仲良くやっていくことは難しい。   | ( ) |
| 13. 障害者は普通の生活を送ることがほとんど不可能である。         | ( ) |
| 14. 障害者に多くのことを望むべきではない。                | ( ) |
| 15. 障害者は人との付き合いを避ける傾向がある。              | ( ) |
| 16. 障害者は健常者より気が動転しやすい。                 | ( ) |
| 17. 障害者は普通の社会生活を送ることができない。             | ( ) |
| 18. 多くの障害者は他の人と同じように楽しいと感じていない。        | ( ) |
| 19. 障害者と一緒にいる時には、自分の言うことに気をつけなければならない。 | ( ) |
| 20. 障害者はしばしば不機嫌である。                    | ( ) |

\*ご協力ありがとうございました\*

Table 3 ATDP の総得点

	A 校 2 年	A 校 3 年	B 校 1 年	B 校 2 年	C 校 2 年
総 得 点	73.42 ± 10.85	72.42 ± 7.46	73.33 ± 10.81	64.41 ± 10.97	71.26 ± 11.43

Table 4 各養成校・学年別の総得点差の検定

	A 校 2 年	A 校 3 年	B 校 1 年	B 校 2 年	C 校 2 年
A 校 2 年	1.0000	.7151	.9794	.0045*	.3987
A 校 3 年		1.0000	.8030	.0153*	.6708
B 校 1 年			1.0000	.0252*	.5560
B 校 2 年				1.0000	.0290*
C 校 2 年					1.0000

\*: p < .05

.05) (Table 4)。

## 2) 因子分析

因子分析にあたっては各因子への固有値 1 以上を考慮し、最終的には 2 因子解を採用した。因子負荷量は Table 5 に示す。因子負荷量 0.400 を基準として項目を選別した。定めた負荷量以下の項目

を除いた結果、総項目数は 12 項目となった。しかし、得られた 2 因子については尺度的に整合性があるとは言えず、因子に命名するのは困難であり、カリキュラムの習熟度によって変化する態度の因子として検討するには不適切であると判断した。今回著者らは、医学生を対象とし、「障害者」

Table 5 ATDPの回転後因子負荷量

因子および項目	因子負荷量
第1因子	
19. 障害者と一緒にいる時には、自分の言うことに気をつけなければならない	0.777
9. 多くの障害者は非常に悩んでいる	0.700
16. 障害者は健常者より気が動転しやすい	0.675
5. 障害者は他の人と全く同じである	-0.659
15. 障害者は人との付き合いを避ける傾向がある	0.575
8. 障害者の世話をするのは政府の義務である	0.495
4. 多くの障害者は自分のことをかわいそうだと思っている	0.483
20. 障害者はしばしば不機嫌である	0.474
第2因子	
13. 障害者は普通の生活を送ることがほとんど不可能である	0.667
2. 身体障害者は健常者と同じくらい知的である	0.630
18. 多くの障害者は他の人と同じように楽しいとは感じていない	0.510
11. 障害者は他の人と同じくらい知的である	0.492
6. 障害者のための特別な学校は存在するべきではない	0.442
12. 重度の障害者は、軽度の障害者に比べて、仲良くやっていくことは難しくない	0.412

を精神障害と限定した調査ではあるが、山本らがForm-0より抽出した3因子解 (Table 6) について、内容的に整合性があると判断したので利用することにした。山本らの抽出した因子はそれぞれ第1因子「性格の否定 (Negation of character)」(7項目)、第2因子「能力の否定 (Negation of ability)」(7項目)、第3因子「正常性の肯定 (Affirmation of normality)」(6項目) であり、全項目含まれている。

### 3) 養成校ごとの比較

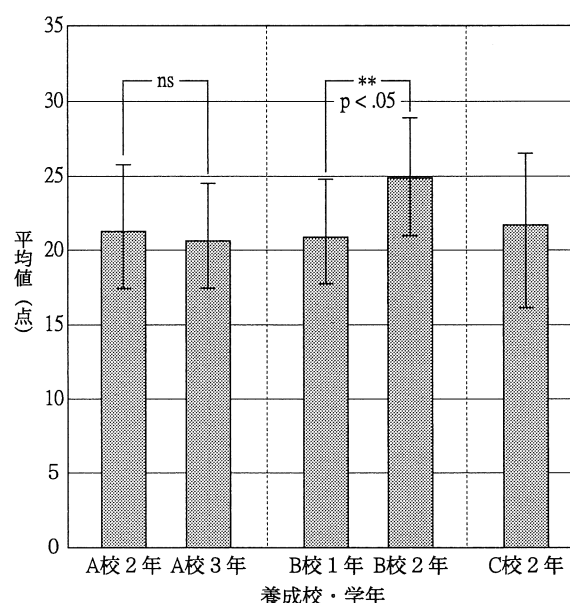
山本らによる3つの因子を下位尺度とし、項目群の粗点合計を求め、各養成校の各尺度得点について分散分析を行った。ATDPの尺度は0を除く-3から+3までの尺度のため、1から6の相対的尺度に置き換えた。否定に関する因子の点数が高い場合は否定的な態度、肯定に関する因子の点数が高い場合は肯定的な態度の傾向があることを示している。

Table 6 ATDP-Form0の3因子解 (山本ら)

因子名	項目番号
第1因子 性格の否定 (Negation of character)	4, 9, 15, 16, 18, 19
第2因子 能力の否定 (Negation of ability)	1, 7, 8, 10, 13, 14, 17
第3因子 正常性の肯定 (Affirmation of normality)	2, 3, 5, 6, 11, 12

第1因子「性格の否定 (Negation of character)」では  $F(2,121)=2.847$  であった。  $p < .05$  で有意差が見られたのはA校の2年次-B校の2年次間、A校の3年次-B校の2年次間、B校の2年次-C校の2年次間、B校の1年次-2年次間であった (Fig. 1)。

第2因子「能力の否定 (Negation of ability)」では  $F(2,121)=1.816$  であった。  $p < .05$  で有意差が見られたのはA校の2年次-B校の2年次間、A



注: グラフ中の有意差の比較は同養成校内のみ記載

Fig. 1 第1因子: 性格の否定

## 考 察

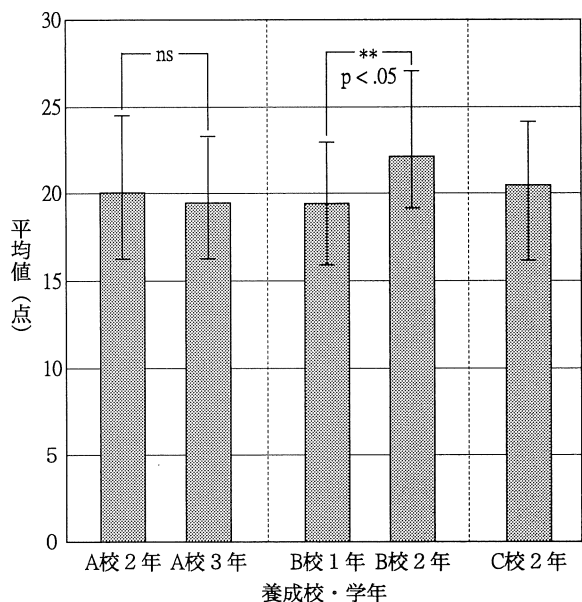
### 1. ATDP の作業療法学生への適用について

今回, ATDP を用いて作業療法学生が持っている障害者への態度に何らかの傾向があるのではないかという仮説に基づいて因子分析を用いて探索を行った。その結果, 明確な因子解を得られず, 作業療法学生の持つ態度は明らかにすることはできなかった。質問紙自体の問題点としては, 質問紙を和訳したことで正確な質問のニュアンスが伝わったか, 選択肢の選び方が学生にとってわかりやすかったか, などが考えられた。調査に協力した学生のから「文章がわかりにくかった」, 「途中で選択肢をきちんと選んでいるか不安だった」という声が聞かれた。また選択肢の指標の中で, 「-1: ほとんどそう思わない」(原文: I DISAGREE A LITTLE), 「-2: あまりそうは思わない」(原文: I DISAGREE PRETTY MUCH)」の区別がわからない, 程度を問われているとわかっていても言葉に惑わされて迷う, などの感想が寄せられた。邦訳する段階で慎重に対応する日本語を選んではあるが, 今後研究を進めていく上でオリジナルに忠実に, かつわかりやすく適切な対応語を選んだものに改訂していく必要性が考えられた。ATDP 以外にも海外で作られた態度に関する評定尺度に関して, 質問内容がわかりにくく, 回答しにくいものがある, という問題点が指摘されていること<sup>11)</sup>から ATDP を学生に適用する場合に重要な課題となると考えられた。

質問紙以外の問題点としては, 今回得られたサンプル数が作業療法学生の障害者に対する態度を明らかにするには少なかったのではないかと考えられた。山本らの医学生を対象とした研究<sup>12-13)</sup>では日本とタイの学生合わせて 637 名の回答を基に因子分析を行っている。今後はサンプル数を増やし, 再度検討する必要があると考えられた。

### 2. カリキュラム進行・経験が作業療法学生の障害者に対する態度に及ぼす影響について

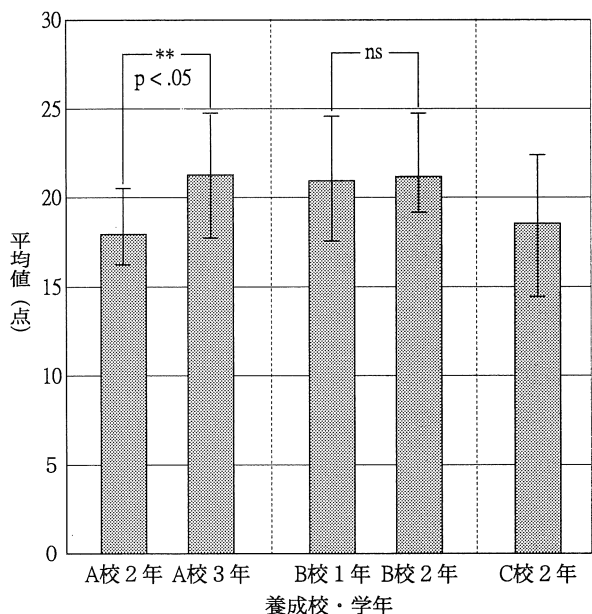
障害者に対する肯定的な態度の指標となる総得点については, B 校 2 年次生を除く各養成校, 学年に有意差は見られなかった。学年の進行, つまりカリキュラムの習熟や経験による態度の変化について同養成校 2 学年のデータが得られた A 校, B 校について検討する。まず, A 校に関しては 2 年



注: グラフ中の有意差の比較は同養成校内のみ記載  
Fig. 2 第 2 因子: 能力の否定

校の 3 年次 - B 校の 2 年次間と B 校の 1 年次 - 2 年次間であった (Fig. 2)。

第 3 因子「正常性の肯定 (Affirmation of normality)」では  $F(2,121) = 6.221$  であった。  $p < .05$  で有意差が見られたのは A 校の 1 年次 - 2 年次間, A 校の 2 年次 - B 校の 1 年次間, A 校の 2 年次 - B 校の 2 年次間, A 校の 3 年次 - C 校の 2 年次間, B 校の 1 年次 - C 校の 2 年次間, B 校の 2 年次 - C 校の 2 年次間であった (Fig. 3)。



注: グラフ中の有意差の比較は同養成校内のみ記載  
Fig. 3 第 3 因子: 正常性の肯定

生, 3年生間では有意差は見られなかった。この結果は Lynos<sup>2)</sup> が作業療法学専攻の学部学生 (Undergraduate) 1~4年生それぞれに行った調査では, 学年が進行しても総得点の変化が見られなると報告しており, この結果と一致すると考えられた。Lynos<sup>2)</sup> は, 学年進行に伴って態度が変化しなかった理由については疑問が残る, としておきながら障害者に対する接触と態度の変化には密接な関係があるとし, 障害者に対してケアを提供する者, それを受ける者としての関係を持ったことがある学生とそうでない学生とでは, 有意に前者の方が肯定的な態度を示していると述べている。Estes<sup>1)</sup> らの同じく作業療法学部のセメスターの学生とセメスター4の学生に対して行った調査では, 後者の方が明らかに肯定的な態度を示していると報告している。その理由は, セメスター4の学生は Level I の臨床実習を経験していること, 学内での講義の中で障害者に関することをセメスター1の学生より学んでいる, という作業療法学カリキュラムの効果であるとしていた。Benham らの報告<sup>3)</sup> では作業療法学生は全体的に総得点が高く肯定的な態度を示した, と述べていた。この理由については, 元来作業療法学を専攻しようとする学生は肯定的な態度を持っているからである, と述べていた。一方, 今回調査を行った B 校に関しては1年生に比べて, 2年生の方が否定的な態度を示すという結果であった。作業療法学生については, 否定的な態度への変化が見られたという報告は見られなかったが<sup>1-3)</sup>, ソーシャルワーカー, カウンセラー, 医師では, 否定的な態度の傾向が見られたという報告がある<sup>3)</sup>。Benham によると, 作業療法学生の方が他の医療系学生より肯定的な態度を示すと考えられる理由は, 作業療法学生は Level I, Level II の臨床実習を経験することで早期に障害者に対する思い違いを避け, 実践における現実性について意識するから, とされている。しかし, 結論は障害者に対する個人の内的価値づけによるものとしている。学生に障害者に対する態度に影響を及ぼす因子としては, 教育, 性別, 障害者との接触が挙げられている。特に接触との関連については, いくつかの研究で論議されている。Lyons<sup>2)</sup> の結論からも臨床実習を含め, 学生個人がこれまでどの程度障害を持った人と接しているかという点が影響していると考えられる。今回の A 校, B

校の各学年の総得点が示したものは, カリキュラムの進行・経験だけでなく, Yucker ら<sup>14)</sup> の挙げている要因が影響していると考えられるが, 今回はそれらの要因について対応した調査を行っていないため, 具体的な要因について言及はできないと考えられる。従って, 今後は臨床実習を含めた経験の程度や学生の障害を持った人との接触度について調査し, 態度との関連を見ることが課題となるであろう。

カリキュラムの習熟度によって具体的に変化する態度の因子があるか, 探索する目的で山本らの示した3つの因子解に基づいた態度について検討した。B 校については第1因子, 第2因子については, 学年進行に伴い否定的な態度へ, A 校については第3因子については肯定的な態度への変化が見られた。これらの変化に対する要因については, 前述のように明確に言及できないが, 総得点と同じく各要因と対応させていくことが今後必要であると考えられる。一見, 否定的な態度へ変化したという結果はあまり好ましくないという印象を受けがちである。ATDP では, 肯定的な態度は障害者がより健常者と同じであると捉えた場合と定義づけられている。しかし, 障害者が生活していくには, その人の身体・精神機能, 能力に応じた工夫やアプローチ, 援助が必要であるという現実的な認識を持てば, 障害者が健常者と全く同じであるというようには捉えにくいのではないかと考えられ, 否定的な態度は作業療法実践における現実性の表れと受け取ることが可能とも考えられる。

今回得られた結果から, 2校が示した変化は何らかの要因が影響していることが示唆された。今後はカリキュラムの進行や経験を含め, 影響していると考えられる要因について明確にしていくことが課題となるであろう。

## 謝 辞

本調査に協力して下さった作業療法学を学ぶ学生, 関係者の皆様に深謝致します。

## 文 献

- 1) Estes, P. J, Deyer, A. C, Hansen, A. Ruth, et al : Influence of occupational therapy curricula on students' attitudes toward persons with disabilities. American Journal of Occupational Therapy 45, 156-

- 159, 1991.
- 2) Lyons, M: Enabling or disabling? Students' attitudes toward persons with disabilities. *American Journal of Occupational Therapy* 45, 311-316, 1990.
  - 3) Benham, P. K: Attitudes of occupational therapy personnel toward persons with disabilities. *American Journal of Occupational Therapy* 42, 305-311, 1988.
  - 4) 堀原一: 医療従事者の態度教育の必要性. *看護展望* 11, 1042-1045, 1986.
  - 5) Paris, J. M: Attitudes of medical students and health-care professionals toward people with disabilities. *Arch Phys Med Rehabil* 74, 818-825, 1993.
  - 6) 三野善央: 精神障害に対する医系学生の態度. *日本衛生学雑誌* 41, 417, 1986.
  - 7) 神郡博, 田村文子: 成人2 (精神科) 実習にみられる学生の態度と変化. *群馬大学医療技術短期大学部紀要* 7, 73-83, 1987.
  - 8) 熊倉伸宏: 看護教育における学生の精神障害者に対する態度変容について—韓, 台, 日の比較研究から—. *社会精神医学* 12, 265-266, 1989.
  - 9) 嶺岸秀子, 他: 精神看護実習が看護学生の精神障害イメージ, 看護態度, 及びアセスメントに及ぼす影響—実習期間の長さの実験の有無による比較—. *日本看護学会* 17, 220-221, 1997.
  - 10) 山内隆久: 精神障害に対する態度・偏見と文化—対人接触による偏見解消—. *日本社会精神医学会雑誌* 5, 136-142, 1996.
  - 11) 東口和代, 森河裕子, 中川秀昭: 精神障害(者)に対する態度についての測定尺度の作成—信頼性と妥当性の検討—. *心と社会* 89, 110-118, 1997.
  - 12) 山本和儀: 精神障害に対する医学生の態度の形成—医学教育の場における国際比較—. *日本社会精神医学会雑誌* 5, 129-135, 1996.
  - 13) Yamamoto, K., Randall, M., Takeda, M., et al: Attitudes of medical students towards persons with mental disorders: a comparative study between Japan and Thailand. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 50, 171-180, 1996.
  - 14) Yucker, H. E., & Block, J. R: Research with the attitudes toward disabled persons scales (ATDP) 1960-1985. New York: Hofstra University, Center for the study of attitudes toward persons with disabilities, 1986.
- 1998. 11. 9. 受稿, 1999. 1. 8. 受理—

## 要 約

作業療法学生3養成校122名を対象に障害者に対する態度とカリキュラムの進行に伴う態度の変化の測定がYuckerらの作成したThe Attitudes Toward Disabled Persons Scales (ATDP)によって可能か探索する目的で調査を行った。作業療法学生の態度の構造を明らかにするためにATDPについて因子分析を行ったが、明確な因子解は得られなかった。作業療法学生2学年のデータが得られた2養成校の結果について検討した。総得点については1校は学年進行に伴い否定的な態度に変化し、もう1校では変化が見られなかった。更に、山本らの抽出した3因子: ①性格の否定, ②能力の否定, ③正常性の肯定; について比較したところ、学年進行に伴い否定的な態度に変化した養成校は、否定に関する2因子についての点数が高かった。変化の見られなかった養成校については肯定に関する1因子の点数が高くなっていた。今回、得られた結果からカリキュラムなどの教育をはじめ、何らかの要因が作業療法学生の障害者に対する態度に影響を及ぼしていることが示唆された。今後は、調査対象を増やすと共にこれらの要因を明らかにしていくことが課題であると考えられた。

キーワード: 作業療法, 態度, 教育